

第十回 再びのオマーン

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

10-1. 再びのオマーン - 工業局顧問として赴任

1996年12月初旬、私はエクセター市の中心部にある中華料理屋で、アラビア湾岸研究所のメヘディ博士やラスメル博士、名誉研究員の元駐イラク英国大使夫妻、所長秘書夫妻、付属図書館で毎日お茶をしたイギリス人女性たち、オマーン人留学生や日本人留学生、麻雀仲間のラミー教授やヒッケン講師、ロンドンから駆けつけてくれた丸善石油での部下で当時コスモ石油のロンドン支店長をしていた山代やロンドンの日本レストランの女将などを招いての謝恩食事会を終え、同11日にスカンジナビア航空で日本に帰国した。

17日には拓殖大学に行き、同大短期大学非常勤講師の辞令を受け取り、さっそく教壇に立った。教室は、同大学の三階にあった階段教室。すり鉢状の底にある教壇から見上げると、百数十人の学生が集まっていた。大学で教えるのは私にとって初体験。翌年2月初旬まで通って講義や試験を終え、学生たちに単位を与えて無事に職責を果たした。

その間、JICAでの研修や身体検査や新たな任務のための準備などで多忙の日々を過ごした後、私は2月27日にタイ航空でオマーンに向かった。妻に「一緒に行く？」と聞いたら、「ついて行くと、私は貴男が連れてくる客の接待に追われてしまう。今回は一人で行って！私は時々行くわ！」と、2度目のオマーン勤務は63歳での単身赴任となった。

再びのオマーンでの任務は、工業開発センター設立に関する助言・指導・調整。経済の多角化を目指すオマーンでは工業開発は国の最重要施策であり、そのための技術基盤整備は不可欠であった。同国の第5次5ヶ年計画（1996－2000年）でも技術研究開発とその普及が重要政策として掲げられ、商工省では1996年に実施のJICA開発調査「オマーン国工業開発センター設立調査報告書」をもとに、工業開発センターの設立を実現するために日本側にJICA専門家派遣を要請した。この要請に応えるべく、オマーン商工省からの指名で私がオマーンに派遣されたのであった。

任期は、1997年2月27日から1998年2月26日までの1年間である。

カウンターパートは、ダハブ工業局長。当時42歳の局長は、ロシアで学士号、アメリカで修士号、英国で博士号を取得した商工省きってのインテリ。

今回は工業局長アドバイザーということで個室が与えられ、前のようにアラブ人の真っ只中に机を置いて働くということではなかった。

工業開発センター設立がオマーンの閣僚評議会で承認されたのが同年9月末と予定より大幅に遅れ、その後の工業局長の海外出張や超多忙などが重なって具体的な検討が一向に進まず、予算も付かずに、目標の1998年1月からの発足は達成できなかった。

本来業務の同センター設立の協議が遅々として進まなかったので、毎朝局長室に入り込み、工業局全般に亘るアドバイスや提言を与えることに努めた。また、時に応じて工業局職員の個々の案件の相談にも乗った。

10-2. 隣は何をする人ぞ - 王族とのすれ違い

再度のオマーン勤務では、職場の近くということで商工省真ん前のシェラトン・ホテルにしばらく滞在した。オマーンでは最も高い9階建ての建物で、最初のオマーン赴任の時に滞在したアル・フラージュホテルより高級な五つ星ホテルである。

1ヶ月ほどして私はここを出て、オマーンの財閥の当主であるアブドラが建てたばかりの住宅コンプレックスの中の1軒を借りた。コンプレックスには、高い塀に沿って2軒で一棟の建物が10棟ほど建ち並び、真ん中に会員制のスポーツ・ジムの建物があった。当時、オマーンで最もモダンな住宅コンプレックスである。場所はクルム地区の山側、広さは3LDK。私は、ここで家事をしてくれるインド人のボーイを雇って生活を始めた。

私の赴任中、妻は何回か日本からオマーンにやって来た。オマーンにいても暇なので、午前中は敷地内のスポーツ・ジムに通うことが常だった。その妻から、「ジムにはオマーンの女の人もたくさんきているわ！オマーンの金持ちの奥さんやその家族の人たちよ。彼女たちはメイドがいるから家事をやる必要がない。あの人たちには時間がある。お金もある」という話を聞いた。妻の話で私の「世界で一番幸せなのはアラブの女性たち」という説に間違いはないと確信した。

ジムの運営は、アブドラの長女が担っていた。彼のロンドンでの目の手術の時に、「ロンドンに行かないの？」と私が訊いたら、「行かないわ。パパにはロンドンで世話してくれる人がいるようだから」というつれない返事をしたあの長女である。ジムには、アブドラの奥さんも友人たちと時々来ているとのことであった。

私の右隣の一棟の右側の家には、アメリカ人の弁護士夫妻が住んでいた。この人たちとは、会えば挨拶を交わしていた。その家の左側、つまりわが家のすぐ隣の家には、常時人が住んでいるようには見えなかった。時々長身のオマーン人らしい男性が来ていた。必ずオマーン人男性が1人・2人随行していた。私は常日頃、この怪しげな長身男性を「隣はなにをする人ぞ！」と訝っていた。

ある日の夕方、私が車で自宅に帰ると、隣人のガレージで煙が立っていた。見ると、長身の男性が奥に座り、お付きの男性がカバブ（羊の焼肉）を焼いていた。話してみようかなと近づくと、くだんの男性が「食べていかないか」と奥から声をかけてくれた。いつもの私なら「シュ克蘭（ありがとう）」と言ってすぐに食事に加わるのだが、その日はその

後に予定があり、遠慮をした。

後日、家主のアブドラにこの話をすると、この謎の隣人は、とんでもない貴人であった。「あの人は、王族。しかも最有力な王族の方！次期国王の呼び声の高い大臣の長兄の方だ」と聞かされた。「残念！そんな高貴な方ならあの時万難を排しても合流しておけばよかった」と悔やんだが、後の祭りであった。「そんな方でもこういうところに時々来て、息抜きをされているのかな」と思った。

10-3. エクセター大学同窓会 - アラブ人男性の思い

私がオマーンに着任した時、エクセター大学で一緒だったオマーン人留学生たちもそれぞれに修士や博士号を取得してオマーンに帰国していた。情報省顧問になった者、スルタン・カブース大の教職に就いた者、大銀行の次長職に戻った者など、故国の第一線で活躍し始めていた。

私は、間もなく彼らと「エクセター大学同窓会」を立ち上げた。メンバーには、ルルも加わった。ルルとは、ルイスというイギリス人女性の愛称。アラビア語で「真珠」という意味もある。私はこの会で初めて彼女を知った。彼女は、私が在籍したアラビア湾岸研究所と同じ建物内にあったエクセター大学アラビア語科を前年に卒業したばかり。彼女の在学時には私との付き合いはなかったが、彼女は建物内で唯一の東洋人であった私を認識していたようだった。

「イギリスの大学を出て、オマーンに住むとは変わっている！」と思って話してみて、私は驚いた。彼女はオマーン生まれだった。オマーンで原油が発見されたのが1962年、初めて輸出されたのは1967年のことである。シェル石油を中心としたオマーン石油開発会社（PDO）がそれを実現した。彼女はPDOで働いていたイギリス人父母の間にオマーンで生まれ、オマーンで育ち、学齢期になるとオマーンからイギリスの寄宿学校で学ぶようになった。大学卒業後に、両親の住むオマーンに帰ってくるのは至極当然のことであった。

彼女のようなケースは、イギリス人の中では特別ではない。イギリス人はクウェート、アブダビ、カタールなど湾岸諸国に早くから進出してきている。中東とイギリスの関係が密接なことを実感した。

アラビア湾岸研究所を財政的に支援していたUAEのシャルジャの首長は、エクセター大学で毎年開催される中東シンポジウムのスポンサーとなり、自らも出席していた。首長は非情に優秀な博士論文を提出し、同大学で博士号を取得した卒業生でもある。シンポジウム後の懇親パーティーでは誰もが自由に首長と話すことができたが、首長にはいつも2名のイギリス人が張り付いていた。相談ごとになると、必ずこれらのイギリス人を通さなければ話ができないような仕組みに見受けられた。

日本でも中東通と言われる人はいるが、ここまでアラブの要人に密着している日本人を

私は知らない。中東への食い込み方はイギリスに人には叶わないと思ったが、ルルの育ちを知って私は納得した。なお、オマーンに帰国後、彼女は大学で取得した資格を生かして、オマーンの子供たちに英語を教えていた。

同窓会メンバーでは、忘れられないオマーン人がいる。イギリスで半年間同じ寮に住んで親しく付き合い、帰国後スルタン・カブース大学の教授になったムカッダム博士である。私がオマーンに赴任してから、妻と一緒に博士を日本料理店に招待したことがあった。ルルも一緒だった。

その際に、ムカッダムが「今回は自分がホストとして、ゲストであるあなた方をもてなしたい」という申し出があった。私が「オマーンで世話になっているお礼だから」と受諾の確答を避けたら、ふだん温厚な彼の顔が不満で紅潮してきた。

「俺の酒が飲めないのか」という抗議からであった。その時に、アラブ人のメンタリティを理解せずに、彼の顔を潰すような自分の出過ぎた行動を恥じた。アラブ人は自尊心が強い。アラブ人の成人は、相手と対等でいなければならないのだ。いつもいつもおごられていては、面子をつぶされることになるのだ。

話は先に飛ぶが、オマーンで2度目の勤務が終了し日本への帰国が決まってから、私は最後のエクセター同窓会を開くべく、ムカッダムに幹事役を頼んだ。ところが、同窓会開催の連絡がなかなか入ってこない。そして、帰国が差し迫っていたある日、急に食事に招待したいと言ってきた。

「メンバーのみんなも来るのかな」と思って妻と指定された場所に行くと、現れたのは彼と奥さんだけ。初めて会った奥さんはアラブ美人。すらりとした長身で、色も白い。聞いてみると、アブダビ育ちのオマーン人女性。その時に、私は彼が同窓会のアレンジをしなかった訳を悟った。彼は、奥さんを私たちに紹介したかったのである。オマーン人男性との集まりでは奥さんを連れてくる事が出来ず、別の場を作ったのであった。オマーン社会の一断面を知る出来事であった。

余談だが、「アラブ美人を日本に紹介したい。できれば日本の映画に出演させたい」というのが私の長年の夢であった。その時、「彼女はその候補者たりえるな」と思った。

私はオマーンを訪れる度に夫妻と必ず食事をする。彼女と会うのは私の楽しみでもある。

10-4、総理大臣は誰？ - アラブ人家庭内における女性の地位

私はオマーンでの再度の赴任中に、「あなた夜はどうしている？女性なら紹介してあげる」と気遣ってくれるオマーン人の友人がいた。私が「あなたは、敬虔なムスリム。そんなよからぬことを言ってよいの」と切り返したら、「ミスターエンドー、俺たちも同じ人間だよ！」との返事が返ってきた。

日本ではアラブ人というと違和感を持つ人が多い。彼らのほとんどはイスラーム教徒、1日に5回お祈りをし、ラマダン月には断食をする。4人の妻を持って、酒・豚肉・ギャ

ンブルはご法度。それに服装が独特である。私がこの人たちと同席したり、その真っ只中にいても、垣根みたいなものを完全に拭い去ることはできなかった。

それが、「俺たちも同じ人間だよ！」という言葉聞いて、この人たちも同じようにセックスをし、子供を作っているのだと認識させられ、アラブの人たちとの距離が非常に縮まった。

アラブの人たちも同じ人間なのである。宗教がイスラムというだけである。日本には神道や仏教を信じる人、創価学会などの新興宗教を信じる人もいる。それでも、宗教の違いによって違和感を持つことはそれほどない。同じ日本人だからである。アラブの人はイスラム教徒であるが、世界を日本に見立てて同じ人間だとみる視点が大切ではないかと思った。

いまのアラブ人たちの生活ぶりも、われわれの暮らしとそれほどは変わらない。日本では「アラビアの人々は沙漠でラクダと暮している」と思っている人がまだいるかもしれないが、湾岸諸国ではベドウィンは数えるほどしかいない。

石油のお陰で、いまは多くの人が近代的な都市の一戸建てやマンションに夫婦・子供と住み、朝には主人は役所や会社へ、子供たちは学校へと出かける。各家庭には電気や水道・ガスも来ている。エアコン、テレビ、洗濯機も完備。スマホも使いATMもある。買物もスーパーマーケットでほとんどが揃う。休日は車で家族サービス。日本のサラリーマンと生活ぶりがあまり変わらない。アラビアの人は異様でも神秘的でもない。

イスラムの国では、4人妻が許される。一夫一妻ではないから、私が現地妻を持って悪い訳がないというわけで、かのオマーン人の友人の申し出は不道徳でも不信心でもなく、当然のことだったのだと後で納得した。

この友人とは、「家庭内の総理大臣」の話もした。私が彼に「私の家の総理大臣が誰か知っている？誰だろうね？それは、ワイフだよ。彼女はわが家のすべてを仕切っている。親戚や隣近所などとの付き合いをはじめとして、仕事以外の外部との関係はすべて彼女の担当。彼女は外務大臣でもある。お金も彼女が握っている。私は、結婚して以来毎月妻から小遣いを貰っている。彼女は、財務大臣でもある。また、子供の教育や家族の健康なども彼女が仕切る、つまり、彼女は文部大臣と厚生大臣でもある。駅への家族の送迎や買い物などで家族で一番車を運転する彼女は、運輸大臣でもある」と話をしたら、彼から「貴男は何？」との質問が飛んできた。私は「なんとか労働大臣だけは拝命している」と答えた。彼に「君の家は？」と訊くと、しばらく考えた後に、「私のところもほぼ同じだ」との答えが返ってきた。

私は、この質問をオマーンの他の友人やいろいろの国の男性に投げかけてきた。この話には、みんな乗ってきた。「わが家の総理大臣は妻。ところで、君のところは？」と聞くと、「同じだ」という答えが返ってくる場合が多い。どこの国でも、男たちが置かれている立場は同じようである。ただ、アラブ人の場合は、さすがに金の面では、「俺が財政大臣」と胸を張る男性が多いように思われた。アラブでは、家族を養うのは男の勤めという意識が

まだ強いかもしれない。

以前、日本に出張してきた若い独身のオマーン人女性を連れて、広島や新潟を旅する機会があった。その時に彼女にも同じ質問をしたが、彼女は「アラブでは男女両方が総理大臣」と優等生的な回答をした。本当はどう思っていたのか。

アラブの社会は、一見男性優位のように見える。男は家では家長的存在で、社会的に女性の進出が目立つものの男性が中心、金も男が握り、厳格な条件があるものの、男は妻を4人まで持てる。

アラブは、結婚しなければ一人前の男と認めてもらえない社会でもある。しかし、男は家族に十分な食べ物を与え、良い着物を着せ、立派な家に住ませなければならない。出来なければ結婚する資格がない。

女性は外出させられないから、買い物は原則男の仕事。子供の送迎、女性の外出のお供、つまり運転手役も男性の仕事。一人前の男として、アラブ社会のルールや社会規範を守る必要がある。もし、2人以上の妻を持って、トラブルともなれば男には針のムシロが待っている。アラブの男性は辛いのである。

女性はアバーヤを着て顔を隠し、劣位のイメージがあるが、家の中のことは女性がすべて取り仕切る。家事、育児。このため家庭の中で誰よりも力を持ち、頼りにされているのは父親ではなく、母親である。私にはアラブ社会は「嬖天下」のように見える。

また、一番尊敬されているのは、父親ではなく母親である。これは、4人妻のせいもあるかもしれない。父に2人以上の妻がいれば異母兄弟全員の父親だが、母は自分を生んだ母一人である。そこで、この生みの母に憧憬を抱くのもかもしれない。男は4人の妻を娶れるが、こういう形でちゃんと仇をとられている。

10-5. 20年ぶりのサウジアラビア - ハードは発展したが、ソフトは？

1997年12月に、リヤドで日本の生産性向上のセミナーがあり、アラビア半島に駐在するJICAの専門家とそれぞれのカウンターパートが招聘された。私もターリク課長とこれに参加すべく、サウジアラビア航空に飛び乗った。実に20年ぶりのサウジアラビア訪問であった。

機上でスチュワーデスが「飲み物は何にしますか」と訊いた。「何があるの」と訊ねると、「ソフトドリンクです。オレンジジュース、トマトジュースなど」と相変わらずの台詞。ビール、ワインなどはない。他の湾岸諸国の飛行機では多くがアルコールを出すようになっているのに、戒律の厳しいサウジアラビア航空は変わっていなかった。

リヤドに着いて、機内から外を覗くと、右手にお城のような建物が広がっていた。世界最大級の規模を誇るキングハリッド国際空港だった。空港ビルの入国審査ホールに入る。総大理石造りで贅の限りを尽くしている。天井がとてつもなく高い。昔の木造の空港ビルの面影はどこにもなかった。

私は何列かの列の一つに並んだ。40人ほどの長い列。ホールでは、サウジアラビア人の係官が入国者が列を乱さないように整理に当たっていた。列を乱そうものなら、すっ飛んで来て、羊を扱うように追い立てていた。

30分ほど待って、私の番になった。係官は無愛想な顔で私のパスポートをくくり始めると、同僚らしいサウジ人が呼びにきた。大勢の人が並んでいるのに、彼は席を立って行ってしまった。待つこと15分、口をもぐもぐさせながら戻ってきた。お茶の時間だったようであった。

それから私のパスポートを再び見始めた。手続きが終わった時、私は仏頂面でパスポートを受け取った。それが私ができる精一杯の抗議だった。施設は立派になっていたが、相変わらずのサウジ人の対応であった。

次に荷物検査。各人に普通に、荷物を開けさせている。その時私が持っていたのは日本人へのお土産用の「昆布巻」で、「開けられると、せっかくの包装が駄目になる」と危惧していた。いよいよ私の番、案の定「開けろ」と言う。知らん振りをしていたら、係官が勝手に包みを破こうとする。仕方なく、自分で丁寧に包装紙を取り外した。係官は箱の中から真空パックを取り出して、さらに「開けろ」という。

「中は日本食。空けるのは無理」と抗うと、彼は別室にいた上役を連れてきた。上役に「これは日本食。開けてしまうと、包装が駄目になる」と訴えると、OKが出た。彼は「ここはサウジだからね」とウインクをしながら囁いた。「大目に見て」とでもいう意味だったのである。

すぐにその係官が席を外してしまったので、検査済みのシールを貼って貰えない。出口に行ったら、最終チェックをしている係官が「シールがない」と文句を言う。「あそこの係官がいないんだよ」と指差したら、そのまま通してくれた。空港を出るのに50分かかった。

出口では、「GCC（湾岸協力会議）国民」の窓口を使えて「入国審査」を早く終えたターリク課長が待っていて、「あまりに遅いので、ミスターエンドーは先にホテルに行ってしまったのかと思った」と言った。「ホテルの車が来ている？」と訊くと、「来ていない」と言う。探してみたが、迎えに来ている筈の車が見当たらない。仕方なくタクシーで行くことにして、換金のために銀行を探した。

キングハリッド空港は巨大空港。「ロビーの端から端まで2キロはある。移動には車が必要」などと憎まれ口を叩きながら、ようやく銀行を2軒見つけたが、両方とも閉まっていた。お祈りの時間だった。みると、エスカレーターの壁に沿って大勢の人がお祈りしていた。

ホテルに電話をしておこうと、歩きまわって探し当てたインフォメーション・デスク3ヶ所にも人がいない。「ソフト面がこんな有様なら、こんな立派な施設を作っても無駄」と私はさらに腹を立てていた。

係員がいるホテル案内窓口を探し当てて、ターリク課長にホテルの件をアラビア語で話

して貰った。ホテル側では「迎えの車が空港に行っている」と言う。こちらが「来ていない！」と言うと、ホテル側は「ちょっと待って」と電話のたらいまわし。待っていた途中でタクシーが来たので、こちらから電話を切った。

タクシーでたどり着いたホテルのレセプションには、サウジ人のスタッフが1人だけで、あとはエジプト人とインド人。仕事は外国勢がこなしていて、チェックインはスムーズに済んだ。空港に迎えがなかったとクレームすると、ホテル側は運転手が待っていたと言う。「運転手が空港から帰ったら、お客をミスしないように注意して」と言い残して、私は部屋に入った。

しばらくして、空港で待っていたというインド人の運転手が部屋にやってきた。聞くと、「自分はこの看板を持って待っていた」という。見ると、たしかに私とターリクの名前が書いてある。そして言い草がよい。「私はあなた方が出てくるのを見た。でも、私はあなた方の顔を知らなかった」。それらしい人が来たら声をかけるとか、看板を掲げるとかやりようがあるのに。

着替えをしてから、在リヤドのJICA専門家とのミーティングのためにホテルのロビーに下りる。その一角にあるコーヒー・ショップを覗くと、VINOと書いたワインの瓶。「え！アルコール？」と思って従業員に訊くと、ノン・アルコールの飲み物だった。

さらに売店を覗いていると、サウジの若者が2人連れで入ってきた。にこにこしながら、「日本人か」と話しかけてくる。人なつっこい。そういえば、かつて石油を求めてサウジに入った時にも、ペトロミンの担当者が人なつこくて、自宅にまで招いてもらったことがある。個人になるとよい人たちなのに、あの空港の役人たちの態度は一体なんなのかと訝った。

在リヤド在住の専門家との会合では、「女性は日本人でも外出の際には黒いアバーヤを着なければならない。(当時は)女性の車の運転は禁止されている。街に出る時には、ムタワ(宗教警察)が見張っているので、カメラは持ち歩かないように」などの注意を受けた。サウジは、まだ特殊な国だった。

ターリクと外で夜の食事をして部屋に戻って、電気剃刀にアダプターが必要なことを思い出してハウスキーピングの番号282を回す。何回かけても応答なし。しばらくしてレセプションに電話をしてアダプターが欲しいというと、「OK。ツー・ミニッツ」という返事があった。

しかし、これがまた来ない。仕方なく、電話のオペレーターにハウスキーピングの電話番号を確かめると、「280と250」という。そんな筈がない。そこに電話をすると2本とも「こちらルームサービス」との返事。まったくいい加減だ。再度、282へ電話。「OK。ツー・ミニッツ」。しばらくして、今度はメンテナンス係のインド人がやって来て用事がようやく済んだ。

翌朝に各地からのJICA専門家とカウンターパートは定刻の8時20分にロビーに集合して、ホテルの送迎バスの到着を待った。しかし、バスが来ない。8時30分には玄関

に出て待った。8時40分になってようやく現れた。

乗り込んで出発しようという段になって、運転手が「会場のサウジ標準化公団（SASO）はどこにあるのか」と私たちに訊いた。私たちを連れていくのが彼の仕事、話にならない。「レセプションに訊くように」というと「SASOに電話をする方が早い。電話番号は何番か」と訊く始末。ようやく場所が分かって出発したのは8時50分近く、20分の遅刻。

会議後の懇親会で、在リヤドのJICAの専門家たちから「サウジの人口は1700万。外国人は600万人ぐらい」、「リヤドの人口は300万弱。外国人は100万。日本人300名。ジェッダの人口は200万ぐらい。日本人300名」、「居住許可をとるのに手間取った。今年3月に赴任したが、まだ運転免許が取れていない」、「サウジアラビアでは、『石油は売っているのではない。恵んでやっている』という意識だ」というようなことを聞いた。

2日間の会議の合間を見て、私はターリクと郊外にあるディライーヤ遺跡を訪れた。以前よりも、整備が行き届いたものになっていた。人っ子ひとりいない。ゆっくり散策しながら写真を撮りまくった。途中町も観察したが、リヤドの街はとてつもなく大きくなっていった。道路も広くなり、高層ビルも多くなっていた。昔とは様変わりの「アナザー・シティ」であった。

定宿だったヤママ・ホテル近辺は昔の面影を留めていたが、よく通ったペトロミンは街のあまりの変わりように探しだせなかった。タクシーの運転手がフィリピン人だったのも目新しかった。1970年代にはフィリピン人など居なかったのに、リヤドにもさまざまな国からの出稼ぎ人が集まっていた。

帰りにリヤド城にも立ち寄った。それは、賑やかな店が立ち並ぶ通りの片隅にひっそりと建っていた。「あれ！こんなに小さかった？」と訝られるほど。周りの町並みが発展し過ぎていて、うっかり見落とすところだった。

3日間の滞在中、リヤドの発展振りには目を見張るものがあったが、サウジ人の他人を見下す態度やハード面にソフト面がついていない点などが気になった。

ただ、変わってきていたことは実感した。サウジ人がホテルのレセプションで働くようになっていた。ホテルのロビーに座っていたときに、サウジ人の若い男女が人混みの中をエレベーターから降りてきた。見ると、2人は手をつないでいる。驚きであった。以前は到底考えられないことであった。なお、この2人がサウジ人であったことは、ターリク課長に確かめたので、間違いない。

帰りの空港ロビーで、「写真を撮ってもよいか」と係官に確かめたら、「OK」と言う。以前私はカメラを構えて警官とのトラブルに巻き込まれたことがあったが、空港で写真撮影出来るようになったことも、驚きであった。

それは、1976年初めのことだった。中東事務所所長として最後のペトロミン訪問を終えての出国時、「戒律の厳しいサウジアラビアもこれが最後！」、「もう緊張する必要もな

い」との開放感に、中東のプロらしくなく私は空港が撮影禁止であることを忘れてしまっていた。

私が空港の写真を撮り始めると、たちまちサウジアラビアの警官たちに囲まれて、カメラからフィルムを抜き取られた。私は、「何をする！」とカメラを取り戻そうと抗ったら、警官に羽交い絞めにされてしまった。さらに抗っていたら、近くにいたサウジアラビア人から「これ以上抵抗すると、貴男は監獄だよ！抵抗は止めなさい」と言われて渋々引き下がったことがあった。

サウジアラビアも随分と変わっていた。

10-6. ベドウィンとの別れ - 砂漠での危機

オマーン滞在中の砂漠への旅は、私にとっては忘れがたいものであった。砂漠での見聞や体験は新鮮で、エキサイティングだった。

満天の月と星。夜の寒さ。砂漠の民との語らい、ベドウィンの手料理、夜の砂漠での歌と踊り、砂漠での洗面とトイレ、砂漠のサファリ、近くの海辺での蛸取りや釣り、ベドウィン部落訪問。

醍醐味は、夜である。月と満天の星の動き、砂以外になにもない虚無の空間。物音一つしない。暗闇の中でちろちろと燃える薪の火。話し相手は、素朴で人間性豊かなベドウィンたち。オマニコーヒーを飲みながら、家族、子供、健康、暮らしの話を交わす。ベドウィンの心の琴線に触れることが出来る。

彼らはこの砂漠でラクダのミルクとデザートで生命をつなぎ、子供を生み、育ててきた。そして、何千年も人間の歴史をつないできた。ここではいやおう無しに、人間とは何か、歴史とは何かを考えさせられる。私が「中東とは人間と歴史を考える最高の道場と心得るべし」というゆえんである。

中東で勤務経験のある日本人でも、砂漠に泊まる経験をする人は少ない。20年以上もアラブの国々で勤務した日本大使館員でも砂漠で泊まるのが初体験の人がいて、「アラビアは、砂漠に泊まらなければ分からない」と確信している私は、「いままで何をしてきたのだろう」と思うことがあった。

オマーンでの再度の勤務も終わりに近づいたころ、知り合いのベドウィンたちにお別れを言いたいものだと思っていた。しかしながら、砂漠は私一人で行ける場所ではない。無理かなと思っていると、前回のオマーン勤務時に砂漠ツアーをアレンジしてくれ、局長から次官に昇進していたアリが「帰国前に砂漠に行く？」と誘ってくれた。こちらは願ったり叶ったり。

そこで、帰国1ヶ月前の1998年1月に、マスカットから2台の四輪駆動車で砂漠に向かった。日本人は私1人。

道の途中で、運転していたアリ次官が車のスピードを180キロ、195キロへと上げ

た。後部座席から速度計を覗き込むと、すでに200キロを超えていた。「大丈夫かな」と心配していると、やがて、210キロに上がった。アリ次官は車を飛ばしながら、後ろを振り向いて話かけてきた。私は、「前を向いて、運転して！」と注文をつけた。初体験のスピードだった。

マスカットからアブダビまでは車で通常6～7時間かかるが、「3時間で行くよ！」と言う同僚のオマーン人がいた。「君は、走っているのではなく、飛んでいるのだろう」と私は冷やかしていたが、アリ次官の運転を体験して「200キロで飛ばせば3時間で着く筈だ」と納得した。

夕方、車はアル・カメルの町に着いた。アリ次官は、この近くのシェイクの息子。「実家に寄って」というので立ち寄った。築150年の石造りでお城のような大きな家だった。見ると、壁面に多くの弾痕の跡。「他部族との戦争の跡だ」と次官は説明した。

やがて、マジュリス（集会室）に親戚の人たちが集まってきた。叔父さんや従兄弟たち。まず、デザートとコーヒーと果物。次に、アラブ料理のフル・コースが供された。スープにチキン、山羊肉の串焼き、各種カレーにアラビアパンとライス、それにサラダ。大きなガラスの容器いっぱいの薬草の入ったスープ。その後にお茶とオマーンを代表する銘菓のハルワが供された。その日の夜食は砂漠ではなく、シェイクの館でご馳走になった。

印象的だったのは、茶菓や食事の給仕に当たった子供たちの礼儀正しい態度。食べ物や飲み物をうやうやしく掲げながら、静かに部屋に入り、客や年上の人たちの順に給仕した。そこには、アラブの伝統がきちんと生きていた。

アラブの人は礼儀正しく、長幼の序をしっかりと守る。挨拶は、年上の人へから始まる。徹底している。「変わりはないか？」との趣旨の「シェ・アハバール（何かニュースは？）、シェ・エルーム（何か情報は？）」という挨拶も年長者から訊ねていく。すべての人にひとわり挨拶が行き渡るまでは、すべて「マーシェ・アハバル（ニュースはありません）、マーシェ・エルーム（情報もありません）」と答えるのが決まりである。若い者が年長者より先に「実は今日こんなことがありました」などとしゃべってはいけないのである。

役所でセレモニーがある時に偉い人がハンジャル（おしゃれ用の短剣）をつけないければ、下の人もハンジャルをつけない。上の人がビシト（ラクダの毛などで織った襟を金で縁取った黒色の薄い外衣。アラブ人が通常着ている白いデスダーシャの上に羽織る）を着なければ、下の人も着ない。というより、上の人がビシトを着ていたら、下の人は一段下がってデスダーシャのみ、上の人がハンジャルをつけていたら、下の者は一段下がって帯刀しないのが通例であった。

夜10時に。次官や私などマスカットからの一行と現地からの叔父さんや従兄弟の計8人が、2台の四輪駆動車で砂漠に向かった。車は漆黒の闇の中を疾走した。1月の砂漠の夜は厚手のシャツとセータだけでは寒く、厚いマフラーも首に巻いた。やがて、車は一張りのテントの前で停まった。空には満天の星。時々流れ星がスーと尾を引いている。目を凝らすと他に二張りのテント。ひっそりと静まりかえっていた。砂漠では、先発隊も加え、

懐かしい顔が揃った。われわれはお茶を飲みながら話をした後、私はアリ次官とは別の老人グループのテントに敷かれてあった絨毯と毛布の間にもぐりこんだ。雑魚寝であった。

朝方であろうか、私はズボンのベルト辺りを触られているのを感じた。「なんだろうと」思っているうちにベルトが外されかけているのに気付き、目が覚めた。誰か、私に興味を持った者が、手を伸ばしてきているらしい。こちとらは、すでに64歳、このテントはたしか年老いたベドウィンが多かった筈である。

まだ、ベルトをまさぐっている。手を掴めば、相手は容易に特定出来た。しかし、それをして相手に気まずい思いをさせるのもと思った私は、大きく寝返りを打って、その手から逃れた。相手も私が起きていることに気が付いたのか、それ以上の行為はなかった。

思いもかけぬ最後の砂漠での親愛の情表現であった。

この手のことは、私はそれまでに2回体験していた。

最初は、何度目かにリヤドのペトロミンを訪れた時に一人でタクシーでお気に入りのダルーヤの廃墟を訪ねた夕暮れの帰り道のことだった。私はドライバーの隣の助手席に乗った。リヤドへ向かう途中、ドライバーの目がギラギラと粘っこいのに気付いた。異様だ。「ちょっとおかしいぞ」とドライバーの方を見ると、着ているカンドウラ（アラビア服）の下半身部分が帆かけ船のように盛り上がっていた。「助手席になんか乗るんじゃない」と思っても、後の祭り。

アラビアでも男と女が生まれる割合は1対1。1人の男性が4人の妻まで娶ってよいのだから、4人のうち3人の男性は結婚できずに死んでいくことになる。そのせいか、男が男を求めることがあるようだ。

私がアラビアに生まれていたら、4人のうち3人の方に入るだろうから結婚出来なかったことは確かで、日本に生まれたお蔭で結婚できてよかったとしみじみ感じている。その時はそんな風に考える余裕などはなく、私は危機一髪の状態にあった。

ドライバーは痩せているが、私よりは長身。年もずっと若く、強そうである。「なんとかしないと。ここは砂漠の中、ヤバイぞ！」と危機感が私の身体の中を走った。

「なんだ、その目は。馬鹿野郎！」と私は精一杯の声を張り上げた。こういう場合は、日本語に限る。言葉は通じなくとも、真剣さでこちらの感情が十分に相手に伝わる。もっとも私はアラビア語が出来ない、相手は英語が分からない。

そこで、私は帆かけ船のように盛り上がっている男の股間のものを左手で思いっきりわしづかみにした。予期に反して、それは鉛筆のように細く、木の棒というよりは、コンクリートか鉄の棒のように固かった。

アラビア服をめくって現物を点検しようかと思ったが、取っ組み合いになると、私が負ける公算が大。そこで、「何だよ、これは！」と日本語でなじり、あとはアラビア語で「ヤッラ、ヤッラ（早く行け、早く行け）」と急き立てた。その後はドライバーと目を合わせないようにながら、注意を怠らぬうちに車はリヤドの街に入り、ホテルにたどり着いて事なきを得たのであった。

その後、ドバイ・アブダビ間での砂漠でも私は同様な経験をした。お相手は屈強なパキスタン人ドライバー。場所はドバイから120キロほど走ってきて、アブダビまであと30キロの所で、日が西の砂漠に傾きかけている頃であった。助手席に乗った私の左手のドライバーの様子がおかしい。大きな目がうるんで、顔は脂ぎっている。

「冗談じゃないよ。この前はサウジの痩せた若者で、今度はパキスタン人の太った中年か」と緊張を感じながらも、徹底的に無視を続け、なんとか無事にアブダビの街に帰りついた。タクシーを降りる時の2人の代金のやりとりのぎこちなかったことが私の記憶に残っている。

私の中東の旅は、石油を求めて西東、旅から旅の「中東三度笠」。しかも、各地に支店などのない丸善石油社員の私は社用車のお迎えなどには縁がない。移動にはもっぱらタクシーを使わざるを得なかったが、以後、助手席だけには一切乗らないことにした。

10-7. UAE大学日本学科 - アラブの大学での初講義

オマーンでのJICA専門家の仕事を終えて1998年2月下旬にオマーンから帰国してすぐに、かつてアブダビ陸軍で空手を教えていたジャパン石油の岩井から電話が入った。当時、岩井はジャパン石油専務取締役役に昇進していた。「アブダビの王族の高等教育大臣とUAE大学での日本学科設置の話を進めている。遠藤さん、協力してくれませんか。取り敢えずは、UAE大で学生向けと教授向けに講義をして欲しいのですが」ということだった。私にはやや荷が重いと感じつつも、盟友からの依頼でもあり、これを引き受けた。

UAE大学は、1977年開校。1997-8年の学期時では人文学部、教育学部、経済・経営学部、法学部、農工学部、医学部の6学部が設置されていて、学生数は男子が約3千人、女子が約1万人、教員数は約700人であった。

私は4月10日に日本を発ち、11日に大学のあるアブダビのアラインにあるインターコンチネンタルに投宿した。当時同大学への訪問者は大学の寮に宿泊するのが普通であったが、私の場合にはホテルが用意され、アブダビ空港からアライン市への移動も運転手付きの車が用意されており、特別待遇であった。岩井と王族との結びつきの強さの証であった。

12日は、大学の副学長、経済・経営学部長などへのあいさつに充て、13日に男子学生向けに、14日に女子学生向けに「日本」という講演、19日に教授向けに「日本経済の発展と日本の経営システム」という講演を行った。

UAE大学では、男女学生が別々に講義を受けるどころか、キャンパス自体が男子用と女子用と別々であった。私にとって女子専用キャンパス訪問というのは初めての体験で、不安でもあり、楽しみでもあった。

講演「日本」の内容は、日本の国土や人口、経済規模、明治維新以来の経済発展、日本とUAEの経済関係、日本人とUAE人との類似点・相違点などであった。

男子向け講義には、学生14人とシリア人の担当教官の計15人が出席した。出席者の中には、オマーンからの留学生もいた。出席人数が少なく、教室ががらんとしていたが、講義への関心は上々であった。1人の学生から週末ラッセルハイマに来ないかとの招待があり、その後ホテルに日本への留学希望の学生が訪ねてきた。

女子向け講義の出席者は、学生37人とチュニジア人の担当女性教官の計38人。女子学生のうち、3人がバルカをつけて顔を覆っていた。あとは、ヒジャブだけで、顔を出していた。こちらの教室は男子学生より活気があり、「私は日本を尊敬している」と言う学生、「日本では奥さんは1人か」、「宗教は1つか」などの質問があった。評判は上々であった。

教授向けには当初「会社」という原稿を用意していたのだが、到着後に日本経済の話をして欲しいという要望があり、急遽ホテルで原稿を作り直し「日本経済の発展と日本の経営システム」という講演を行った。出席者は、経済・経営学部のうちの経済学科、経営学科、統計学科、経営情報システム学科などの教授・助教授など22人。さすが学者の先生たち、多くの質問があった。また、「よかった」、「素晴らしい」との評価も貰った。

学部長からは帰りがけに「今後も大学に来てください」、大学スタッフからは「あなたはここに戻ってくる人」と言われて教職員の待遇に関するパンフレットも渡された。

アブダビ人の副学長からは「14歳と12歳の息子たちを日本の国際的なサマースクールに入れたい。そういう機会があるか」、学部長からは、「UAE大の教授に研究補助資金を出してくれる大学はないか」という宿題ももらった。

帰国前に駐UAE日本大使からの呼び出しで、アブダビにある日本大使館に立ち寄り、大使から「日本とUAEとの関係強化に知恵を出すように」との依頼を受けて帰国した。

10-8. オマーン協会再開に向けて - 努力むなしく

UAE大学での講義を終えて帰国してからは、妻との九州や京都旅行への旅などを楽しんで過ごしていたが、9月に入って最初のオマーン勤務時に一緒だった埴（はなわ）元駐オマーン日本国大使から「至急会いたい」という電話が入った。

まだ残暑が残るその月の下旬の晴れた日に「なんの話かな」と訝りながら、指定されたご自宅の近くの多摩京王プラザホテルの喫茶ルームに伺った。元大使から「私はあなたの帰りをずっと待っていた。1995年にオマーンから帰ってきて日本に居るのかなと思ったら、イギリスの大学に行ってしまった。1996年に帰国した時にこれで捕まると思っていたら、オマーンに行ってしまった。今回ようやく捕まえた。いま日本オマーン協会が活動を停止しているが、これを再開したいと思っている。商社筋の情報では、近くカブース国王が来日されるという話がある。この協会の事務局長に就任するという含みで、この協会の活動再開に協力してもらえないか」という打診であった。

帰国後、働くという選択もあった。現にJICAから仕事を受注している大手商社系のコンサルティング会社から、専門家としてインドネシアへ行ってもらえないかとの執拗な

申し入れも受けていた。ただ、私にはその気が全くなかった。

オマーン在住中やイギリスの大学でオマーンの人たちに教えもしたが、逆にいろいろと教えてもらい、世話にもなった。これからは、この恩返しをしたいものだと私は強く感じていた。そんなところに塙元大使からの話、私はすぐに「やらせていただきます」とこれを受けた。

日本とオマーンの友好協会の歴史は50年前に遡る。オマーンという国に興味を持った当時慶応義塾大学の学生であった柳澤宗夫が1972年6月にオマーンを単独訪問し、カブース国王に謁見した。オマーンがすっかり気に入った柳澤は、翌年6月に再度オマーンを訪問。その際、オマーン側から港湾管理、医療サービス、農業振興への協力を要請された。柳澤はこれらの要請を実現させるための第一歩として親善協会の設立を熱望。この話が柳澤研究所の所長であった柳澤の父灩や昭和海運の社員であった椎名健太郎などの民間人を中心に進められ、1973年9月の日本オマーン親善協会（Japan Oman-Friendship Society）の設立にこぎつけた。会長には安倍晋太郎、名誉顧問にはアラブ協会会長の中谷武世が就任した。同月27日には学士会館で安部晋太郎会長、中谷武世氏、小金義照代議士、アラブ諸国大使他約250人を招いての協会設立パーティーが盛大に行われた。

一方、オマーン側では、カブース国王の認可の下、1974年3月の勅令によって「オマーン日本親善協会（Oman-Japan Friendship Association）」が設立され、会長にはオマル・ザワウィ国王顧問が、名誉会長には国王特命代理のスウェイニ・ビン・シハブ・アル・サイド殿下が就任した。オマーンが国との友好親善団体を結成したのは、この日本向け団体が初めてであった。縁の深かったイギリスとの親善団体ではなかった。日本に対するオマーンの親近感の現われであった。1924年の志賀重昂のオマーン訪問、この訪問に触発された1936年からのタイムール国王の神戸滞在、日本人妻大山清子との間に生まれたブサイナ王女の存在が背景にあったのだろうか。

日本オマーン親善協会は、東京や現地でのオマーンの建国記念日への出席、オマーン日本親善協会の設立記念式典への出席、同年11月のスウェイニ殿下一行10人の訪日受け入れなど当初は活発に活動していたが、その後は活動が低調となり、事実上消滅状態となった。

この事態を打開するために、1986年に新たに日本オマーン協会（Oman Japan Society）が設立された。会長には、藤尾正行（当時衆議院議員、自民党政調会長、労働大臣、文部大臣を歴任）が、理事長には駐サウジアラビア日本大使として駐オマーン日本大使も兼務した中村輝彦が就任した。しかし、この協会の活動も下火になり、私が2回目のオマーンでの勤めを終えて帰国した当時は、ほとんど休眠状態であった。

塙元大使と私は多摩京王ホテルでの面談の後すぐに行動を開始し、10月に入って当時同協会の理事で事務局長を務めていた天野とニューオータニのロビーで面談をした。席上、天野から協会活動再開に関する中村理事長の意見が披露された。「再開活動をやっていただけるなら協力する。ただし、バブルがはじけて以降景気動向が思わしくない状況なので、

企業がこの話に乗ってくるかどうか。難しいだろう」というもので、天野から「私も同意見です」と付け加えられた。

埴元大使と私は中村理事長が進めてもよいという意向であれば、関係者に集まってもらうことを提案し、さっそく10月中旬に国際文化会館に中村理事長、天野事務局長、埴元大使と初代の駐オマーン日本大使である加藤元大使、それにオマーンに駐在した日本の商社員第1号の伊藤忠の佐々木と私とが集まった。

活動再開への重要課題が会長の選任、事務所、活動資金であることを確認し、11月のオマーンの建国記念パーティーの席上で、中村理事長と天野事務局長が藤尾会長と協会理事の尾身幸次衆議院議員（後に経済企画庁長官、沖縄及び北方対策担当大臣、科学技術政策担当大臣、財務大臣を歴任）に会って、協会活動再開について意向を聞いてもらうこととなった。同議員はオマーン訪問の経験もあり、ザワウィ国王特別顧問とも親しく、日本オマーン協会の再開には熱心であった。

中村理事長は、キャリアの元外交官。こういう国際交流団体に政治家が絡むことについては非常に慎重であった。最難関の外交官試験に合格しているという矜持のせいなのか、政治家は胡散臭いという思いのせいなのか、官僚が政治家に対して優越感や不信感があることを痛感させられた。理事長に政治家の2人に会ってもらうことへの説得が容易でなかったことが記憶に残っている。いまは、政治家と官僚の立場が逆転、高級官僚の出世が政治家に握られているやに見え、今昔の感がある。

同月下旬には、埴元大使、天野事務局長と私が状況報告のために当時の駐日オマーン大使を訪問した。大使からは「カタール協会や他の湾岸諸国の親睦団体に日本の会社が多く参加している。なぜ、オマーンとの友好団体に日本の会社は参加してくれないのか」と嘆かれ、「協会再開の活動に、在日オマーン大使館は最大の協力をする」との話があった。

その年の11月18日夜に開かれたオマーン建国記念日のパーティーに、私は埴元大使と出席した。パーティーの終盤に、理事長と事務局長が藤尾会長、尾身議員と話し合う機会を逸したことを告げられた埴元大使と私は、中村理事長、天野事務局長、加藤元大使を国際文化会館に集めて善後策を相談し、理事長に尾身議員との面談をお願いした。

12月初旬に、天野事務局長が尾身議員と面談した。議員からは「難しい時期だが日本オマーン協会の活動を再開したい。いま活動しているみなさんにもお会いしたい」、「会長は政治家よりも民間の方にやってもらうのがよい。自分は理事長をやる」、「事務所は、尾身事務所を提供することも可能だ」とのことであった。

これにより、年が明けた1999年1月中旬に、尾身事務所に尾身議員、中村理事長、天野事務局長、加藤元大使、埴元大使と佐々木と私が集まった。協議の結果、「まず、会長を決める必要がある。尾身議員が会長の候補者であるT自動車社長とI商事社長に会って話をする」、「当面、事務局の仕事は尾身議員の秘書が務める」ことが決まった。

同下旬に尾身事務所に、1月に集まった上記メンバーが集まった。席上、尾身議員から「T自動車は金は出すが、会長職は引き受けないとのことだった」、I商事社長には近く会う」

との状況報告があり、その後の会議で「趣意書、予算案を作成する必要がある。これは、天野事務局長、塙元大使、遠藤が担当する」、「事務所、スタッフ、活動内容については引き続き協議する」ことを決めた。

2月には、天野事務局長、塙元大使の2人と私で趣意書と予算案を作成した。その後、尾身議員がI商事社長にコンタクトしたが、「理事としての参加はするが、会長は無理」ということで、会長を見つけることができなかった。さらにその後にオマーン大使がI興産石油、加藤元大使がS石油、私もベイルートの家の葬式もやった中東の戦友河村が副社長に昇進していたので彼を介してM商事社長に、また畏友のK石油社長に面談して依頼したが、いずれにも会長職を承諾してもらえなかった。

会長の選任ができずに、結局この協会再開の話は立ち消えとなった。

尾身議員と駐日オマーン大使と私と3人がオマーン大使館で会って、「止むをえない」という最終結論を出したのを覚えている。

2000年8月に、8年に亘って日本に駐在したオマーン大使が帰国することになった。休眠中の日本オマーン協会には、何の動きもなかった。大使の送別会を日本オマーン協会に頼頼めるような状態ではまったくなかった。その時に尾身議員から私に、「せめて大使の送別会ぐらいはやりたい。手伝って欲しい」との連絡が入り、私が招待者名簿の作成や調整、招待状は尾身議員と中村理事長の連名で出すことを担当することにして、理事長の了解を取り付け、尾身議員事務所が招待状の発送、パーティ会場の設定、送別会の運営などを担当してその準備を進めた。

そして、8月7日に、ホテル・オークラでなんとか送別会を開催することができた。パーティーには日本オマーン協会会長も出席したが、協会の主催としてできなかったことに一抹の寂寥感が残る送別パーティであった。

その後、2001年に来日した駐日オマーン新大使と尾身議員と私とで日本オマーン協会の活動再開について再度話し合ったが、その時も会長を引き受けてくれる会社を見つけられず、話は立ち消えとなった。

その年の11月のオマーン・ナショナル・デーの席上でも、中村理事長、天野事務局長、塙元大使らと話し合ったが、「協会は休眠とせざるをえない」ということとなり、日本オマーン協会再開への私の関与はそこで終わった。